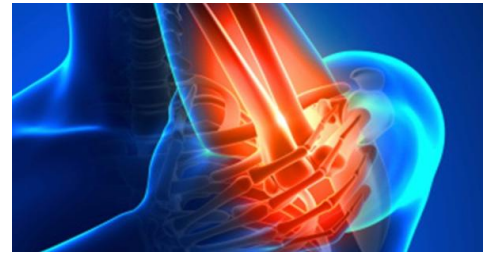


肘はスポーツや肉体労働の過負荷等で痛みが発生しやすい部位のひとつです。
一般的には、痛みが出ている部位=局所に着目し、レントゲンなどの検査を行います。



一般的に考えられる原因

スポーツ（野球の投球動作・ゴルフクラブのスイング動作・テニスラケットの素振り動作など）による繰り返しの負荷による、上腕骨内側上顆または上腕骨外側上顆部分の炎症（筋や腱の変性・滑膜炎の炎症）などオーバーユースが原因として最も多くあげられています。

肘痛の一般的な治療

消炎・湿布
痛み止めの処方
装具療法、物理療法
運動療法、生活動作指導
等

肘痛に対する遠絡療法

遠絡統合医学では、肘痛の原因を局所性と中枢性に分けて考えます。痛む部位に、骨折があったり、打撲や外傷などのはっきりした原因の場合は局所性、特にきっかけがなく原因不明で発生した肘痛の場合は、中枢性と考えます。

レントゲン検査等の診断で異常が見つからない、スポーツ歴が無いのに肘が傷む、今までと同様の生活をしているのに肘の痛みがでている。そういったケースでは肘関節に原因がないことがあります。中枢神経系の問題を改善することで痛みを消失させる可能性があります。

中枢性の肘痛の場合、原因部位は頸椎・胸椎・腰部の高さの脊髄との関係があると診ます。

中枢神経系の機能を再建する事は、肘痛を根本的に良くすることにつながります。

肘痛の原因中枢例

野球肘（手掌を前に向けて肘をまっすぐにして下ろした時に肘の後ろ側が痛む）

⇒頸椎レベルの脊髄

ゴルフ肘（手掌を前に向けて肘をまっすぐにして下ろした時に肘の小指側が痛む）

⇒胸椎T4.5レベル脊髄

テニス肘（手掌を前に向けて肘をまっすぐにして下ろした時に肘の外側親指側が痛む）

⇒腰椎L4.5レベル脊髄

遠絡統合医学では、神経機能の障害を神経細胞と神経線維に分けて分析しています。

痛み症状は神経線維の障害になります。神経線維の障害が修復されるためには、血液やリンパ液、電解質が十分に循環する必要があります。遠絡統合医学では、神経系の伝達も含め、血液やリンパ液、電解質などの流れを総称してライフフローと呼んでいます。スムーズなライフフローが十分に確保されている事は自己の修復力、治癒力に直結します。遠絡統合療法の目的はライフフローを調整する事にあります。つまり、身体の自己治癒力を再建させる事になります。「長く患っている」「症状が変化しない」という状態の根本に対してのアプローチができます。

症例 1 30代 男性

左手握力低下、肘から小指にかけての痛みで来院。痛みが強く肘を伸ばしにくいとのことでした。整形外科ではゴルフ肘と診断され、痛み止めの注射を受けたが全く症状の改善がなかったとの事でした。

背中を打診すると胸椎レベルで強い反応を確認。全身疲労も見受けられた為、間脳レベルから胸椎レベルの中枢治療を行いました。

初回治療時、小指にちょっと触れるだけで激痛だったのが、治療後は痛みが半減し、肘を自然に伸ばせるようになりました。

3日後に2回目の治療に行ったところ、肘から小指にかけての痛みも穏やかになり、その後は腕のこわばりもなく、治療後は痛みなく帰宅されました。

症例 2 50代 男性

なかなか肘の痛みが取れず整形外科を受診したところ、ゴルフ肘と診断されたとのことでした。大会に出場するほどゴルフに熱中されていたこともあり、そのまま放置。しかし、肘の痛みが改善しないのでゴルフの練習を休み様子を見ていたところ、腰痛と肩関節痛も合併し始めました。肘痛の改善どころか他の場所も痛み出したために来院されました。

初回の治療で、胸椎レベルと腰椎レベルの治療を行ったところ、肘痛が発症してから初めて痛みが消えたとの反応でした。

現在は、2〜3カ月に一回身体のメンテナンスを兼ねて、継続治療をされていますが、肘痛は出ておりません。

解 説

一般的にはオーバーユースにより炎症が慢性化して痛みが出ているとされていますが、本当の原因は別の所である中枢神経にあることも考えられます。特に胸椎レベルの病態は肘の症状に多くみられます。